

藤村 滋弘 [藤村 滋弘賞]

築山有城 (メインギャラリー)

“disk garage”というタイトルが付いた築山有城さんの黒い円形作品。大きさが違う20作品が螺旋状に展示されている様子は、まるで無限に続く宇宙に誘われているようです。そして、ひとつひとつの作品にもその世界観が表現されています。実は、作品の素材は、シナベニヤ板、ツヤ消し黒塗料、木工用ボンドというホームセンター等で日常に手に入るもの。それでもって壮大な表現できるのはアートならではの素晴らしさです。見る者のイマジネーションを刺激してくれると同時に和やかにもしてくれます。「轆轤を回している時、楽しくて、楽しくて、・・・」と話していた築山さんが印象的でした。“楽しい”は創造の源泉ですね。

藤谷 けい [3331 藤谷 けい賞]

スクリプカリウ落合安奈 (メインギャラリー)

いつの時代だろうか。女性2人が満開の花の庭先で微笑んでいるセピア色のポートレート。この2人の顔には1つのビニールが縫い付けられており、呼吸を共有していることが窺えます。

落合さんからルーマニアでのこの見知らぬ古い写真との出会いの話と聞き、そこからこの仲良く写っている女性たちのストーリーへの妄想が止まらなくなりました。そして普遍性と女性性を持ったこの作品を本能的に欲しいと思ってしまいました。この一連の作品シリーズ「明滅する輪郭」の呼吸の可視化の表現を見ると、ほんの0.0000...1%かもしれないけれど、自分の成分が他者に入り込み、良い影響を与えていたり、誰かの記憶の一部に刻みこまれているという確信、またそこから対人としての世の中について少しだけ優しく思える気がしてきます。ルーマニアと日本、2つのルーツを持つ彼女だからこそ、「異なる価値観」の気づきだけでなく、逆に国や時代を超えた「共通の意識や記憶」についてもセンシティブに受け止めることができるのではないのでしょうか。多幸感をそのまま真空パックしたようなこの作品が手に入り、私も幸せです。今後の活動も期待しております。

堀内 勉 [ソーシャライノベーション賞]

ナガタマコト (メインギャラリー)

最近、アートフェアの同質化が言われていると思います。アートが街おこしになることから自治体も積極的に後押ししていますが、結局、そこで展示される「コンテンツは何なの？」ということが問われている訳です。

特に、まだマーケットができていない若い作家については、その美術商品としての価格よりも、「あれ??コレなんだろう??」と目をひく、足を止める作品であるかどうかのポイントだと思っています。そういう意味で、ナガタマコトさんの新しい木彫作品は、今回、これは一体何なのだろうか?と最も私の目をひいた作品でした。そして、木を愛する私としては、どうしても見過ごせませんでした。それにしても、この作品、一体どうやって彫ったんだろうか?

前川 俊作 [前川 俊作賞]

楊珪宋 (メインギャラリー)

陶器の作品を頂くのは初めてです。器を連想させないところとヌメツとした感触が新鮮でした。道ばたの野草のぶっきらぼうさと生命感にも惹かれました。一見インテリアクス風 (失礼) ですがしっかりアートに踏みとどまっている点も良かったです。

松下 憲史 [トリマツ賞]

ナガタマコト (メインギャラリー)

丸山 晶崇 [ミュージアムショップ・ティ賞]

中村 太一 (メインギャラリー)

以前の個展のDMを手に取り、展示に行けなかったのですが、気になっておりました。今回展示されている作品群の前を通ったときに同じ作家とは気づかなかったのですが、とても気になってたちどまりました。実物が拝見でき、また購入できてよかったです。今後の活動も楽しみにしております。

三沢 恵子 [アートエバンジェリスト協会賞]

宮北 裕美 (メインギャラリー)

ひとめぼれでした。自身の映像作品から切り出された、“静止している”はずのその作品は、時間が流れ、浮遊し、まるでそこから踊り出てくるようでした。アーティストのパフォーマンスから紡ぎ出された、軽やかな表現からは、身体の美しさは、美しい生き方にも通じることを感じます。丁寧な生き方を示唆し、記録と未来が同居する作品です。

都橋 はる美 [都橋 はる美賞]

村上 慧 (メインギャラリー)

せおわれて歩く家、たくさんの足で今にも歩き出しそうな家。家は自由を手にした。今度はどんなところに住んでみようか。

森下 泰輔 [アトラポで賞]

齊と公平太 (メインギャラリー)

齊と公平太さんの冊子の作品は「現代」と「アート」が接続された「現代アート」という言葉に違和感を持つところから始められていることに共感を持ちました。現代アートという語がいつごろから使われたのかに関し大正時代まで調べますが、現代の意味で使用され始めたのは70年代ころからではないかとの結論に至っています。ほかにも将棋のように見えるチェス盤の提示など、普段あまり気が付かないことに思考をめぐらせていることに好感を持ちました。

安田 逸美 [これなに賞]

大久保 あり (メインギャラリー)

柳 正彦 [Store Front 賞]

スクリプカリウ落合安奈 (メインギャラリー)

蚤の市や古本屋での古写真の探索、複写、拡大とプリント、さらに紙面の加工。創作のベースとなる「古写真」を用意するまでの、目には見えないプロセスについての説明を聞くまでは、今回展示されたシリーズは、表面的にはシンプルに見えていました。

しかし、文化、風習、時間を超えた、人間の根源を見せ、考えさせてくれる作品となっているのは、スクリプカリウ落合安奈さんが二つの文化的バックグラウンドをお持ちゆえに想像しています。

欧州 (多分、主として東欧) と極東、芸術文化のみならず、衣食住、全てのレベルで異なっている人々の写真の上に、ビニール小片のコラージュを施すだけで、全ての人々に共通する「呼吸」そして「生きること」を見せ、感じさせる作品を作り上げる・・・素晴らしい手法ですね。同時に、写真の中の、今はこの世には存在しなくなった人々が生きた時代であっても、私自身がいるこの現在であっても、人間にとって、最も根源的な「活動」が、呼吸であることを思い起こさせられました。

シンプルと書いてしまいましたが、フレームの選択、余白の大きさ、そして、ステッチなど、細部にわたった拘りと丁寧さが、作品をより魅力的にしています。

山口 栄一 [E.Yamaguchi 賞]

楊珪宋 (メインギャラリー)

「やきもの」という制約が多い表現の中に、ユーモアと植物への愛情のようなものを感じました。量におきたいです。

山本 敦子 [山本 敦子賞]

天牛 美矢子 (メインギャラリー)

独特の世界感と作品の完成度の高さに惹かれました。購入した作品は、森の奥に住んでいる妖精のようにも見えますが、もっと恐ろしい、人間の力では制御できない存在のようにも見えます。自分の心の中にもこんな子どもが住んでいるのかもしれない、と思い、手元に置いておきたくなりました。これからも魅力的な作品を制作してください。応援しています。